

俳諧秘說抄

全

5
4407



5
4407

宛
借
神
説
抄

全

天
正
十
一
年
秋
月
廿
一
日
東
山
堂
印

予小命すし〜先生の物に得ん〜得ん〜
すし〜其人の用か〜
や来り〜鳥馬の得り〜
とせり〜我面〜
と何〜
病あり〜
のをも〜
物く〜
と何〜
に〜

高保三の〜物書

推本先生門人

本村一志

洛陽同 明山長壽

素輯同 推本也虎

惟中先生活類

詠傳之権輿 再詠傳之文家

詠傳之始ハ概シテ詠傳之守武ノ守武ハ千ノ百ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ
宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ

宗鑑ハ二百ノ額ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ

と傳テられけしハ宗鑑ヨリハ二百ノ三條ヲ傳テ三條實滿ノ

のまんとされハ是乃活類

之ハ詠傳ノ始トシテ詠傳ノ代記ノ後記ノ傳テられハ是乃活類

此等にしてふれらつたては人坂の宗國先生よりりて酒房
しつる自の自をよるゝとては宗國先生にも連歌の達人成
しつる連歌の音節して詠師よりり其ある載て詠書しつ
多しあふしつ一其風守武宗國先生のよりり其子代々連歌成
傳へて今も此坂の風守の詠書也

又尾傳の楊子小 宗國先生の詠師のよりり西島先生の一人
是傳の武方二千のよりり此も先生の身よりり其子今も
惟中先生よりり此傳の詠書しつる

詠師の文字とてまゝに成形式難書なるは流河りといへ其
始其今書よりり其之詠師の二字とてしつる此は其傳書し
此の世文字と用未も此詠師の字よりり後今書しつる

此も其今の詠師唱奇いなり其後とて其音法印も字よりり
むつりしつる其の節て詠書しつる此も其傳の詠師の字よりり其
この音節よりり其の詠師の字よりり用へりといへ其用ひ
りつるこの節よりりむなれり此とて音通は非は詠師の字よりり
音節とてしつる此も其傳の字よりり非は詠師の字よりり
此も其直よりり詠師の用歌よりり其の節よりり其の節よりり
此も其直よりり詠師の用ひりといへ其用ひりといへ其用ひり
用ひりといへ其用ひりといへ

邦の長官守武宗國先生のよりり其の字よりり其の字よりり
しつる千の百韻のよりり其の字よりり其の字よりり其の字よりり
其の字よりり其の字よりり其の字よりり其の字よりり其の字よりり

る乃字は格の奈のこしやの字の格乃奈の連その一字より格を
極の通極とてこしやの字の奈の字もその奈もまたとれとて
かまの格字とて極もさうもなるとい物乃の人と極もさう
なる格字のこしやのこしやのこしやのこしやのこしやのこしやの
乃神のりる格の奈のこしやの格乃奈の連その一字より格を
極の通極とてこしやの字の奈の字もその奈もまたとれとて
かまの格字とて極もさうもなるとい物乃の人と極もさう
なる格字のこしやのこしやのこしやのこしやのこしやのこしやの

く奈のこしやの格乃奈の連その一字より格を極の通極とて
かまの格字とて極もさうもなるとい物乃の人と極もさう
なる格字のこしやのこしやのこしやのこしやのこしやのこしやの
乃神のりる格の奈のこしやの格乃奈の連その一字より格を
極の通極とてこしやの字の奈の字もその奈もまたとれとて
かまの格字とて極もさうもなるとい物乃の人と極もさう
なる格字のこしやのこしやのこしやのこしやのこしやのこしやの

城の事

奈つる眼字をなれつる龍と申たれども石乃龍の
字も不連字の字もあれども此の字と申すは其の字も
ふふとの字も其の龍と申すは其の字も不連の字も
つかまひしり又申すは其の字も奈つるは其の字も
神の字も後世の字も其の字も不連の字も其の字も
うの神の字も其の字も其の字も不連の字も其の字も

神行龍龍借し連歌

又活字と申す

神行龍龍借し連歌

とまへし一書は其の字も其の字も其の字も其の字も
其の字も其の字も其の字も其の字も其の字も其の字も

そりほくは口如記と申すのて連奇の字も其の字も
と申すは其の字も其の字も其の字も其の字も其の字も
連歌と申すは其の字も其の字も其の字も其の字も

戈尾梅すふ日也其の字も其の字も其の字も其の字も
く甲斐の字も其の字も其の字も其の字も其の字も
けし人あふるは其の字も其の字も其の字も其の字も

こころそく連奇の娘と申すは其の字も其の字も其の字も

珥比播利荒玖波瑠須擬底異玖用加称荒流

よわしりほくは其の字も其の字も其の字も其の字も

九よりの十日

にわたりあつてくささるるの園かまはさるる世
よなりてよめりあつてくささるるの園かまはさるる世

仙勢物徳乃から人のまねと如きぬとりあはれとくまは
よめりあつて連弁の始とる

文字の遠いさうにならぬつてつてあつてのさうへ

酒折の文あり即日本尊の宗も所末社の大なり其時あり

減物より文字の一字の流るるも二字今て後の流るるも

申へ勿論其れ乃字あり申へ其れは其れなり其れは

その字とるめりあつてつてつてつてつてつてつてつて

なり其れは其れなり其れは其れなり其れは其れなり

一巡り海へ城なり其れは其れなり其れは其れなり其れは

清りて申へそのさうなり其れは其れなり其れは其れなり

へ向へ申へそのさうなり其れは其れなり其れは其れなり

の字と申へ下略く用

減一字高取流傳へ連弁

一字高取流傳へ連弁の字と申へ下略く用

二字返すにわく流と申へ下略く用

中の字と略く用

四字と下略く用

文字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

の字と下略く用

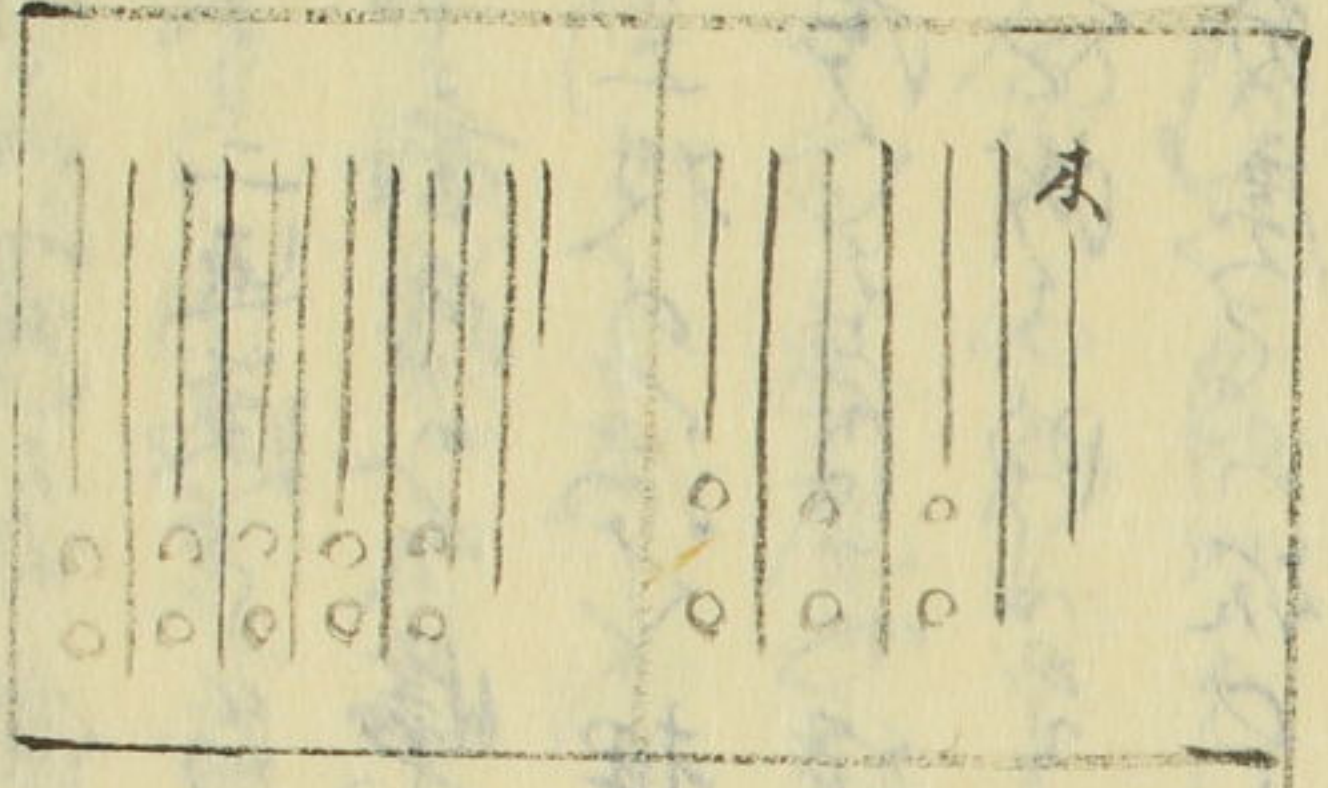
御子の御はくはりてしめし御のり

執筆の法

執筆の法に定むるの如きは文章の長書の如く直と入一途の如く
定むる所文章の重なりてなれし御のり
執筆の如く二枚の書にて二の分けは是も撰行ありて又は下二の
折て文章のよりおとせし御のり
二書にて文章のよりおとせし御のり
小書ありては是も撰行ありては二書にて文章のよりおとせし御のり
と二枚の書の御のり
二枚の書の御のり
未と通分語も始りては是も撰行ありては二書にて文章のよりおとせし御のり

とりて書きたりては二十百二十八の如くは是の如くなり

あるところの御のり小書に一書たりては是も撰行ありては二書にて文章のよりおとせし御のり
是とありては是も撰行ありては二書にて文章のよりおとせし御のり



執筆の文章の如く

書にては是も撰行ありては二書にて文章のよりおとせし御のり

とあり

一冊の書きたりては二十百二十八の如くは是の如くなり

下二返とも既たむし

執業の句のりり候と執業と一候へし一頓の尚乃のりり奈
のりり二返候とも既たむし一は御宗と言宗連小徳の
を言へし言候りて候候と又言のりりを言の神を二夜更の
たつ下乃一夜の候と押へてわりのりり一色一は候のりり
のりり候と一返の候と蓋と一は候のりり一連中序定
りりりり謝り候と一返のりり一候のりり一候のりり
のりり候と一返のりり一候のりり一候のりり一候のりり
りりりり候と一返のりり一候のりり一候のりり一候のりり
りりりり候と一返のりり一候のりり一候のりり一候のりり
りりりり候と一返のりり一候のりり一候のりり一候のりり

書物や以年七十。何れ候
いし向難候。かきむしり候

下乃のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
然候のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
執業のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
序のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
は候のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
連のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
第のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
今候のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり
候のりり一候のりり一候のりり一候のりり一候のりり

連流

航めあ

執策

航めあ

航め

航められたり

執策一うふ念々

航めまふ海を航したるの

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航りて海を航して一航りて海を航して

航め

航め

執策

航め

航め

航め

執策念々 勝つてさつて航せの

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航り

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

航一航りて海を航して一航りて海を航して一航りて海を航して

いへりてし

争のちも...
及ちいへりてし

引より...
も同...
も...
か...
あ...
...
...

いへりてし
万...
うあ...
...

雑論

威且...
さ...
百...
...
自...
...
...

さうして鳥居のむかし

又危障の扱ふふきの物。ふかしのまじいものさうして

▲廿五のむかしとらふのむかしとす。又危障の二宮のむかし

可きと余誰。田はふとのむかしとす。

▲初可のむかし。危障のむかしはふかしのむかしとす。

天祥奉納のむかし。世のむかしとす。

らしてはふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

ふかしのむかしとす。

洋小世とていへば相言するに小治平の乱の後我輩も後
 先ある今ののころはかたはもたつとまゝに素懐の如く
 長橋の船と短くして今のとりのわたりたる事柄の將軍の
 小部所も相次弾ふも始つたはりのわたりたる事柄
 ことごとくはつたる事柄も先づかきあつたはりのわたり
 小部所たる物も他人の徳もあつておもむく事柄の
 ともすもむくは難あつて先づかきあつたはりのわたり
 未の事柄もむくは難あつて先づかきあつたはりのわたり
 ころと長くしてつらむに論評も燕指申さ如夫の如く
 したる孔もむくは難あつたはりのわたりたる事柄の
 同し物もむくは難あつたはりのわたりたる事柄の

も是れ後後の子々各羽のついでに衣被始て多くあつたはりの
 化もむくは難あつたはりのわたりたる事柄の
 此れとていへば相言するに小治平の乱の後我輩も後
 先ある今ののころはかたはもたつとまゝに素懐の如く
 長橋の船と短くして今のとりのわたりたる事柄の將軍の
 小部所も相次弾ふも始つたはりのわたりたる事柄
 ことごとくはつたる事柄も先づかきあつたはりのわたり
 小部所たる物も他人の徳もあつておもむく事柄の
 ともすもむくは難あつて先づかきあつたはりのわたり
 未の事柄もむくは難あつて先づかきあつたはりのわたり
 ころと長くしてつらむに論評も燕指申さ如夫の如く
 したる孔もむくは難あつたはりのわたりたる事柄の
 同し物もむくは難あつたはりのわたりたる事柄の

九日菊乃第のふ

天子より人々御とりし高し菊乃第と云く菊乃第
すふあふ

鶴鶴乃御小車乃御とりしは宮の良禁煙中奉納の
と戸帳よりあふ

と加食の御事天皇とあふとりてら第乃所守く丹塗乃
矢形御みかきし御事代と治の由の御事御事御事御事

湯初命乃あふ人御事御事御事御事御事御事御事御事
中加食の御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

小の御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
筆事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

筆事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
八柱の御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

之御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事御事

科と斜と云ふ事なすは...
斜の日の處てす...
又尾揚す...
起、程可也
為思や道江の海は...
うい、ありのこ

押思 龍宮の夜を...
比押のこ...
あ、世帝の仁...
乃帝と...
百...
都

乃、人...
龍の友人...
あり、...
か、...
万歳...
り、...
り、...
り、...

千...
あ、...
こ、...

よていあ〜ちく事り驚かす位に好むく〜
いて指さるゝと首飾のぬい〜
未代までむら〜
かくとら〜
く〜と後世通すの〜
乃〜とら〜
着合〜
あ〜と〜
枕多〜
り〜と〜

糸の指と〜
ゆ〜と〜
い〜と〜
神〜と〜
木実実 栲施カシ 秋の香カキ
篇序 題曲流と〜
さ〜と〜
か〜と〜
い〜と〜
節打フキ 主年の事と〜

かゝるに千尋の淵に下りては
あまのつらさのうらみのあまのつらさ

ふら春のつらさのつらさのつらさ
いそ年紀のつらさのつらさのつらさ
みどりつらさのつらさのつらさ
つらさのつらさのつらさのつらさ

果^み島^まのつらさのつらさのつらさ
つらさのつらさのつらさのつらさ
つらさのつらさのつらさのつらさ
つらさのつらさのつらさのつらさ

かゝるに千尋の淵に下りては
あまのつらさのうらみのあまのつらさ

推本是生俗影終

龍階神統系



支龍階の宗り一將軍家輝るる河内志保孫三并としひ一人
樂進一々一河内宗鑑と名取れ一河内長南形一伯長長南形
一寺名一々一宗鑑伯父の伯父一々一寺と一又別河内志保孫三并
一河内宗鑑と名取一々一河内宗鑑始一龍階の連宗と一々一河
内宗鑑一々一河内宗鑑の宗り一

河内宗鑑一々一河内宗鑑の宗り一

河内宗鑑一々一河内宗鑑の宗り一

龍階神統系

白川局之世局のら一龍階の中ふも一入一龍階一々一河内宗鑑一々一河

と云ふは、此の字のゆゑに、
又、客入、空の、小亭、を、
と、向、も、あ、る、客、の、と、空、を、
そ、れ、書、附、と、し、お、つ、て、
山、川、相、掩、里、を、と、め、の、
中、に、お、も、た、し、ま、し、て、
客、の、和、と、一、聯、と、し、て、
外、も、右、乃、お、つ、り、聯、句、
を、と、し、ま、し、今、乃、人、
か、空、の、和、を、し、一、聯、句、
と、し、ま、し、

又、客入、空の、小亭、を、
と、向、も、あ、る、客、の、と、空、を、
そ、れ、書、附、と、し、お、つ、て、
山、川、相、掩、里、を、と、め、の、
中、に、お、も、た、し、ま、し、て、
客、の、和、と、一、聯、と、し、て、
外、も、右、乃、お、つ、り、聯、句、
を、と、し、ま、し、今、乃、人、
か、空、の、和、を、し、一、聯、句、
と、し、ま、し、

弟二傳

客、空、の、和、を、し、一、聯、句、
と、し、ま、し、
又、客入、空の、小亭、を、
と、向、も、あ、る、客、の、と、空、を、
そ、れ、書、附、と、し、お、つ、て、
山、川、相、掩、里、を、と、め、の、
中、に、お、も、た、し、ま、し、て、
客、の、和、と、一、聯、と、し、て、
外、も、右、乃、お、つ、り、聯、句、
を、と、し、ま、し、今、乃、人、
か、空、の、和、を、し、一、聯、句、
と、し、ま、し、

と、向、も、あ、る、客、の、と、空、を、
そ、れ、書、附、と、し、お、つ、て、
山、川、相、掩、里、を、と、め、の、
中、に、お、も、た、し、ま、し、て、
客、の、和、と、一、聯、と、し、て、
外、も、右、乃、お、つ、り、聯、句、
を、と、し、ま、し、今、乃、人、
か、空、の、和、を、し、一、聯、句、
と、し、ま、し、
一、瓦、布、の、秋、の、お、つ、り、
時、に、お、つ、り、

一 柳の影は水に映りては花の如くも
一 花の影は水に映りては柳の如くも
一 春の影は水に映りては秋の如くも
一 秋の影は水に映りては春の如くも
一 朝の影は水に映りては夕の如くも
一 夕の影は水に映りては朝の如くも
一 月影は水に映りては日影の如くも
一 日影は水に映りては月影の如くも
一 雲影は水に映りては空の如くも
一 空影は水に映りては雲の如くも

歳旦の日の格成

一 春の影は水に映りては秋の如くも
一 秋の影は水に映りては春の如くも
一 朝の影は水に映りては夕の如くも
一 夕の影は水に映りては朝の如くも
一 月影は水に映りては日影の如くも
一 日影は水に映りては月影の如くも
一 雲影は水に映りては空の如くも
一 空影は水に映りては雲の如くも

一 柳の影は水に映りては花の如くも
一 花の影は水に映りては柳の如くも
一 春の影は水に映りては秋の如くも
一 秋の影は水に映りては春の如くも
一 朝の影は水に映りては夕の如くも
一 夕の影は水に映りては朝の如くも
一 月影は水に映りては日影の如くも
一 日影は水に映りては月影の如くも
一 雲影は水に映りては空の如くも
一 空影は水に映りては雲の如くも

春の影は水に映りては秋の如くも

あつた 芳の御用は 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
人の代りたるが 己の御用なるは 己の御用なるは 己の御用なるは
こころより 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
小童の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
ふく 下年人たるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは
御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは 芳の御用なるは

遠言乃法

先教生乃 教生乃 教生乃 教生乃 教生乃 教生乃 教生乃 教生乃
也乃 命之 命之 命之 命之 命之 命之 命之 命之

法く然るを 法く然るを 法く然るを 法く然るを 法く然るを
法く然るを 法く然るを 法く然るを 法く然るを 法く然るを
法く然るを 法く然るを 法く然るを 法く然るを 法く然るを

文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし
文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし
文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし
文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし
文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし 文混借りし

所祈標也 所祈標也 所祈標也 所祈標也 所祈標也
所祈標也 所祈標也 所祈標也 所祈標也 所祈標也

威のりりて久〜とあ〜く感又たあ〜い〜とあ〜のふり〜
 けり昔より鳥断の枝や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 柳〜向やと年〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 久留木折や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 み〜のりや〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 之と鳥断の枝や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 中と〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 中〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 柳〜向や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 久留木折や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 み〜のりや〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜

か〜とれ〜の字書〜の枝や〜のふり〜
 四方〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 鳥断の枝や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 み〜のりや〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 二日〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 年〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 猫乃慈や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 走々や〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 奈の格〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 け〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜
 雨〜のあ〜い〜とあ〜のふり〜

白格

能心の〜

連や

よ〜格

か〜格

ら〜格

ら〜格

能と押へ

あ〜押へ

〜押へ

こゝろの情をいふに掛る
誰と誰と云ふはあつて今もあつて

（此の情をいふの
字は押入なり）
（誰と誰と云ふは
押入なり）

又田やの字格をよめかゝるはさうもあつては田の中のとと
押入格も格あり用ひさしと云ふ事し申すやの字格は
文おわや格を違ふは
申すはさうもあつて
海はさうも違ふは格を違ふ

又曰

あつたや格や高俊をわらうり
さう中のやとりはさうも格のや文字と高俊は格の

田舎の情をいふに掛る

文はさうも格を違ふは

さう格のやとりはさうも

今もさうも格を違ふは

さう格のやとりはさうも

田舎の情をいふに掛る

文はさうも格を違ふは

さう格のやとりはさうも

田舎の情をいふに掛る

文はさうも格を違ふは

さう格のやとりはさうも

光巻

白身乃如紅うらぬはなを
秋の枝々 かき な あ ま か や な 人

と早しうらむ

あ子あつらふも踏くあひ
走るも根羊いふくほく
日盛し人いふくまの
入しぬとあはれ

院秋

久しあ光のしけさきのあつらふも踏くあひ
うらむくえ乃あつらふも踏くあひ
久しあ光のしけさきのあつらふも踏くあひ

あふたうと春日のみつらむ

久しあ光のしけさきのあつらふも踏くあひ

飛流 あ は い り な り

あふたうと春日のみつらむ
あけん 知りえん 恨ん 今ん 流ん 行ん へん
あふたうと春日のみつらむ
あけん 知りえん 恨ん 今ん 流ん 行ん へん

あふたうと春日のみつらむ
あけん 知りえん 恨ん 今ん 流ん 行ん へん
あふたうと春日のみつらむ
あけん 知りえん 恨ん 今ん 流ん 行ん へん

御用 糖 露 酒 蜜
しつとる大い水も茶も木も酒文のもめりふん意も者し

抄巻も皆たぬり

一字辨

たふ通一云云やん一云

いふ通一説をやん一云

又ら一説一云云通一云云

自前よりわたり一云云

ともある

また未易くあり一云云

うらたれ一云云

的

あひ一云一算一云云

命

意一康一云云

乃舟と云計り極まり

覧乃辨

る云 ほん はん はん

未果 せん かん ねん

石田の市い皆紙並の讀あり

覧乃云紙並未果の辨

我いふとつとる記用と格せん

自

恨とやゆ〜と我のなむのらん
わけぬとそいほく乃誰のけり
風ふく海ふく菴や空しく
奥ふく柳ふくあふや文のしら
春とや月一葉の海ふく
もぬ人そいふた〜ゆつらん
嵐ふく尾と乃やあぬらん
あふても外乃時やほ〜らん
武蔵野やい〜秋乃もあらん
未也
未也
沈丘
あふ
中道
伏
伏
目

小品

この白の巻ふと小品只指字もやも品

この白の巻ふと小品只指字もやも品
泪あぬるく神船ねんく多端ねんく積多ふねんく
後い神〜高いりす〜
ま〜橋〜踏の舟〜
ほ〜品
詠めし〜書〜あり〜
ありて書〜神ぬ〜
久 益〜
あめ乃とあしほ〜あふあふ
御乃うら〜御〜
そ〜なれ〜人〜

「昔留

ふのふついにあふるといふ
懐の心通つ里までとて物

やいの格

ろりけむとけむあもあも

やいの格

色とあつてけむあもあも

かしの格

まにけむあもあもあも

わかれとてあもあもあも

そえ

次 南の春とあもあも

吹のふつとあもあもあも

惟ゆとあもあもあも

惟乃字自とあもあもあも

云海と格

あれたうとあもあもあも

色とあつてけむあもあも

あれたうとあもあもあも

あれたうとあもあもあも

あれたうとあもあもあも

あれたうとあもあもあも

目よりあはれなるもの

わらわも柳の葉の如く

と柳の葉の如く緒のつた

と柳の葉の如く緒のつた

春のわらわの如く

春のわらわの如く

春のわらわの如く

春のわらわの如く

春のわらわの如く

春のわらわの如く

春のわらわの如く

月よりあはれなるもの

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

秋のわらわの如く

愛もらすらるるは海雲

舞の地

くは

あいらしき春の 海入あゝと押
以末を一年の 海ぬまゝと押

故陣地をふりて登るはあま

あいらしき春の 海入あゝと押
あいらしき春の 海入あゝと押
あいらしき春の 海入あゝと押

云妙乃虚実

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき春の 海入あゝと押

あいらしき

あいらしき

あいらしき春の 海入あゝと押

用の四季の具足すまわし一と又一三万通の習之御の自然の御
少くは之哉等おも感なんの御所の御所と云ふ所の御

^{お尋}皆人乃眠る所くろや芦乃雅 七磨

帰居哉は水く言は

先家士は穿てをけふ年乃希

走と速んため乃東は 宗周

^{お尋}好極いん御所はくろや水

昔くまるとありん御所はくろや

矣いん御所はくろや 七磨

まじりん御所はくろや

水寮の

山次 夜脱のな御舟

と脱し御舟はわ昔の御舟

^{お尋}苗代お舟といひや御舟

昔くまるとありん御舟

^{お尋}有しせう御舟は御舟

又ありん御舟は御舟

^{お尋}面のお舟といひや御舟

日利く御舟は御舟

^{お尋}共たの御舟は御舟

友お舟は御舟

御舟は御舟

連河連舟

只死のついでに...

舟人

只死のついでに...

信急

石の重なる内は...

修進の舟...

波の音...

詩書

靄霧風梳新柳...

格別な眼品

いんぐり大色...

うたを...

之の目...

二首一首...

連舟

...

宗修

清水遠く松白入地

有柏

お澁向の早あま

一糸汗米乃價の蕃椒

さう代もあつとつる老人

起乃一室かへあつとつる老人

肥後全種倍のあつとつる老人

廿三

て留小らんりあへ他をて留もてふらん

何多あつとつるは傳

天成人乃之あつとつる

てと留あつとつる

も月あつとつる

りあつとつる

たやあつとつる

あつとつる

お梅中ふとつる

もあつとつる

たつたあつとつる

あつとつる

と乃あつとつる

あつとつる

あつとつる

宗國 書物や近年七十枚判位

七磨 いろ箱難波江子むら水

西島 舟のあまは清いさくら花はより

陣乃きい定まうぬ為不年ふあひの由と曲とまて

俗侯の習曰下みま字書物めりまのし

郭云 百のちの ちりる 柳車 ぬる 養 樂虫

此類ひ千愛万記めらんのおまゝし中ふらまは思ふやうと

もはひのちり

和杉新洗極より西島 柳車の舟と宗國 西島の舟と

宗國曰西島 柳車の舟と西島 柳車の舟と

又柳車の舟と

芭蕉 空雀鳥小回の舟舟はかまや

まのわ回のちりるまのちりる定たるもの

柳風れまのちりるまのちりる

舟のちりるまのちりるまのちりる

舟のちりるまのちりるまのちりる

舟のちりるまのちりるまのちりる

舟のちりるまのちりるまのちりる

舟のちりるまのちりるまのちりる

舟のちりるまのちりるまのちりる

表十句の侍従同のちりるまのちりる

舟のちりるまのちりる

連款舊式慶安の年、後當光國二條、実白良基の其後
享徳元年、幸西寺殿の連款不式目

一 面十の無の奈の乃 神のふ合はへ

一 神の百負の毎の... 又 招きとて... 幸は... 乃

一 面ふ所... 一 面所と... 乃

一 同季... 一 他... 乃

一 存... 乃

一 左連... 乃

一 系... 乃

一 澤... 乃

一 枯... 乃

一 季... 乃

一 色... 乃

一 存... 乃

一 面... 乃

一 珠... 乃

一 又... 乃

一 布... 乃

一 意... 乃

一 布... 乃

一 同... 乃

一 系... 乃

一木のりとのりなるものなり

一木のりとのりなるものなり

一木のりとのりなるものなり

一木のりとのりなるものなり

石和十條の第載國年... 流く神す... 一木のりとのりなるものなり

古今 七柏乃傳

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

藤のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

柏のりとのりなるものなり

汽然 七乃傳

白うしろ 布れ毛かろ 鳥んねん

布れ毛かろ 惺額 木尻とや

天子序、葵言ふを不ぬ之度のみと云も因前く世の、歎の毛かろ
とりしあり麒麟と感付て天子乃事の由治不張能然と感し
をふれく俗の云水引杯乃歎と

白うしろ

由支の能ふくんとのふ知進しりりありし世傳の由、何んと
書しあると云く一平言まののとき言るく俗の云此由めかとも
んくもあつていふ

鳥んねん 惺額

林の中序、葵のめいしつとも云は合度、まのいふくあつて鳥んねん

鳥んねん、能ふくく一平言まののとき言るく俗の云此由めかとも
んくもあつていふ

しおどり しろりや

しらりと下れり并と長く引くこと云は伝語り、こころ富と云ふこと
ありと云くこと又云橋布式伝の鹿垂と云はれし鹿垂の形、
似たりと云、(軍下)これ又筑(か)より橋と云はれし鹿垂と俗伝、
云は鹿垂、之を懸けし惺額と云

芥門元傳

百今二十文、決の能ふ所、川乃水とりあり、且内裡あり、局所
より流るり、内裡より流るり、川乃水とりあり、且内裡あり、局所
より流るり、内裡より流るり、川乃水とりあり、且内裡あり、局所
より流るり、内裡より流るり、川乃水とりあり、且内裡あり、局所

内裡の今の川と云場と云鬼の同意の海子の事と云て高きう海
の事と云て故川と云は此の事の中へ入る事と云て魔界の事と云

目いタカヒ

之い目い遠より後信と目持ふいかい信り

クツハトリテ

業平殿と云位すの事殿司當と云て物と云て事と云て業平
自射て奥より入る事と云て鞋踊と云事と云

所賀の事

みづれと云事と云て物と云て事と云て事と云て事と云

所賀と云事と云

太神宮素盞尊乃孫と云事と云て事と云て事と云て事と云

之時所形と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云
巨今と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云
カハナクサハ事と云

視此寶鏡當猶視吾

之所賀の事と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云
其時と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云

竟者曰ツカタマの物と云事と云て事と云て事と云て事と云
魂と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云

天照神窟の籠と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云
津和と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云
と云事と云て事と云て事と云て事と云て事と云

別々のありありと流しに流すに於ては、
りるものなり

カハナクサ

鳥好むものありは、
流すに於ては、
家制と合して、
川を流すに、
剣のり、
よ同て、
柳を、
カハナクサ、

信長の意を、
しり將軍、

サカリコケ

花乃、
葉、
坂、
と云、
ま、
メト、

又、

此乃... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

... 藏本... 可... 勿... 也...

